平和への道

——空路か道路か——

長谷川久一

同一生命の連續の上にあらはれた幾多の變遷のあと、そこに始めて歴史は存在する。「ローマは亡びず」と云ひならはされてゐるが、ローマ建國以來今日に至るまで約二千數百年の間、幾度かの興亡隆替を經て來たとは云へ、伊太利の中心は依然としてローマの都であり、今もまたその通りである。昔のローマ人は夙に土に化してしまつた。長い衣を身に纏い足に草鞋をつけたローマの市民は、千餘年の昔にもはやローマの街から姿を消してしまつた。それは跡方もない過去である。併しローマは長い歳月の間單に伊太利といふ邦土の首府乃至中心であつたのみでなく、種々な意味に於て歐羅巴の中心でもあつた。ローマ大帝國の政治的中心乃至文化の中心地點であつた時代から法皇の御膝下の靈地として、中世以來今日にまで及んでゐることは、ローマなる土地が有してゐる偉大な力である。恐らくこれほど長い間首府としての生命を持續しつゝある都は他に類があるまい。古ローマの軍隊がその陣頭に押し立てた旗幟と、今日の街頭を飾る旗飾りとは勿論同じものではない。併

しそれが同一のローマなるものの裡に生れたものである以上、決して異つたものの單なる連續ではあり得ない。そこに「ローマは亡びず」のいはれが存在するのである。中世に及んではローマ市或はローマ帝國、尙ほひろく云へば歐羅巴全體が朽ちた大伽藍の如く將に倒壞せんとしてゐた。人々はあたかも巨大な夢魔の手にとらはれてゐるかの如く、數世紀或は十數世紀にわたる人間の努力によつて次第に成就された政治、經濟その他すべての組織が一朝にして破綻し、彼等自身の生活が中心の支柱を失つて支離滅裂になるのを感じた。しかし彼等の心を最も强く壓迫したものはおそらくこれ等の物質的破局ではなく、もつと精神的な或るものに他ならなかつた。蓋し人間の墮落は彼の最大の能力である知力の誤用に始まり、彼は次第に神聖なるものから離れて危險な自由意志のみに賴らねばならなくなつてゐたからである。しかし人は尙ほ希望をすてず、最後の破綻が來る前、今一度過去から現在にわたるすべての人間の努力を集中し、自己の墮落の原因となつた同じ知力の透察力によつて神に結合し、長い間見失つてゐた至福をよび戻さんとした。ダンテの「神曲」は、これに應へたもので絕望に近かりし中世人に、永遠なる眞理の生々とした紛ふかたなき色彩のうちに再びその世界を見いださしめた。かくしてローマの傳統は脈々として流れて來てゐる。歷史はすべてを肯定し、またすべてを是認する。一切の事象が同時にそこに取り入れられて、雜駁は雜駁ながらそのまゝに歷史の流れに呑まれてゆく、武力と法律と敎會との三つの力による世界的組織の核心として永遠をみとめうべきこの都のヴアチカン宮システィータ禮拜堂の天井畫は、世界の無限の轉變を最も壯

大な構圖にあらはして我々に示してゐるのである。

かくの如くに當時の世界の都であつたローマは統合の都でもあつた。ローマ帝國の强みは、その嚴格な機構と壯大な外觀とに示されたのであつた。富と權力との集中の結果は、壯麗の大土木が營まれた。廣大な版圖の各地からは、珍寶奇材を集め來り、たゞ一つのこの都を彌が上にも裝飾する資料とした。外國征討の度毎に、多數の奴隷や、財寶を戰利品として齎らし歸り、以てローマを壯麗にした。數里の外からは數條の水道を引くやら、チベル河を整理して、そこに人民集注の場所を設くるやら、人力の限りを盡して偉大な都にまで作りあげることに努力が費された。その觸手にも似た道路は各地に通ぜられることになり、ラムブレヒトが巧みに形容した如く、巨大な蜘蛛の手の如き役目を務めるに至つたのである。

古代ローマ人の作つた彼の立派なヴィア・アッピアの大街道は、曾つては古ローマの將軍たちが、外國征討の凱旋に際し、堂々たる行列をつくつてローマの城門へと進んだ道であつた。かかる場合に於てこそ、ヴィア・アッピアの歷史的意義が十分に發揮されたと思はれる。今日ではこの道路は、ローマの近在の諸村から毎日葡萄酒を運ぶ幌馬車の往復する道になつてしまつて、赤、青、樣々の色に塗りたてた原始的な農民の車輛が毎日朝はローマ市へ向つてゆき、午後は同じ道を我が家へと歸りゆくのである。通行するものは、かくの如くに全く別箇のものとなつたとは云へ、支配を形式的に完備する精神は、どこまでもこの大道に殘つてゐる。ここに吾人はローマ式を認めるのである。それが人

間の意志によりて集中された權力を物語り、そこに費された資財と勞働と知力の如何に大であつたかを今日と雖尙ほ誇示してゐるのである。實にローマの宇內的文化は神話にも等しいと云つてよからう。各地へ通ずる道路によつて宗教、藝術その他苟くも生命あるものの粹は、みなローマに集められて、交換せられ、また再びその領土內へと無限に分散しゆくのであつた、宗教も他の土地に生まれてその成果がローマの坩堝の中に入れられて、搔きまぜられたその一つであつた。そこへ持ち來され一旦こゝにて鍛錬されなければ、到底世界的發展は遂げられなかつたのである。是れ實に歷史的に避く可らざる道程であり、そうするより外に仕方のない歷史の必然とも謂つべきものであつた。法律もローマ資本主義の隆昌期にあたつて、これに適應するものとして育成せられ、成型するに至つた。藝術に至つては謂ふもさらなる次第で、この都に建てられた華麗な凱旋門や、宮殿浴場寺院等一々枚擧するに遑ない有樣である。ローマの町に全くのところ帝王の指によつて支配されてゐた。そこにローマの偉大さがあるので、基督教もローマ法も、かくして世界的組織にまで發達せしめられたのであつた。

今日の經濟組織もまたローマへの通路によつて發達せしめられたものの一つに他ならない。現在のアントワープに商權を讓り渡した元のブルージュの町の名家ヴン・デル・ブルス家の名前から今日のブールス(取引所)なる名詞が起つて來てゐると考へられてゐる。どうしてヴン・デル・ブルス家は榮えるに至つたかと云ふに、各地からするローマへの獻金を取り扱ふについて最も信用のある爲替

業者となつてゐたからである。十三世紀の末葉に當つてリューベック市の市會が、ブルージュの町に於ける最も信賴に値する爲替取引委託者として數回に亙つて、ヴン・デル・ブルス家の名前をあげてゐる決議錄が殘つてゐる。當時リューベック市は屢々ローマへ向つて支拂をせねばならなかつたため、市會はその手形を特に確實と思料せられるものに依賴した譯であつたのである。その方法は市の代理者がブルージュの町にやつて來て、ブルス家に泊まりこんでその手續きをすますと云ふ次第であつたので、ブルス家は、十五世紀の中葉まで旅宿業者を兼ねてゐて、その邸宅は一箇のオステルであつた。この商權を引きついだのがアントワープの町であつて、アントワープでは、人の生死について賭事が行はれ始めたのが今日の生命保險として發達を來し、十六世紀には法皇の選擧について賭事が行はれて之に對する禁令が發布されたことがある。

かくの如く金錢、爲替等の取引取組等の行はれる中心に多數の人が集まり來る有樣は、丁度我が德川時代に町人藏元淀屋の門前に大阪市中の米商が來集して取引を行ひ、ここに相場のことが起つたのとその軌を一にしてゐるのである。毎日かくの如く多數の人々が來集するところは、自然その必要上その廣場とか又は附近一帶は鋪石しなければならぬやうになり、鋪石街路が發達するに至つたのである。

凡そかくの如くに、一切の生命はローマに通じてまた各地へと再び流れ返へつたのであつた。人類はローマ帝國の沒落と否とに拘はらず、種々な意味に於ての「ローマ帝國」を建設しつつ今日に及ん

だのである。しかもローマの世界支配は現在反つて裏切られつつあるのではあるまいか。ヴェルサイユ條約の結果澤山の國々が出來て互に關稅障壁を高くすることにのみ腐心し、自他ともに苦しんでゐるといふのが卽ち今日の現狀ではないか。ボールドウイン氏は二、三年前に放言した「凡ての道はローマに通ずといつたのは昔のこと、今では凡べての道は戰爭に通ず」と。一觸卽發の危機の傳へられるのも敢ていはれなしとは斷言できぬのである。このときに當り、獨り米國は着々としてローマの統合の大精神を實現しつゝ進んで行つてゐる、彼れの强みは四十八州の相互の間に交通の障碍の少しも存在しないといふその一事にあることを擧げねばならない、國內市場は頗る廣く、國內消費の旺盛は海外貿易を振興せしめ、生產配給の基本的過程から、金融の圓滑的機能に至るまで、經濟的構造のあらゆる部分は、相互に依存し、容易に好影響を及ぼしうる仕組になつて進步を遂げてゐる。航空、ラヂオの發達は驚くべきものがあるに拘はらず、貨物、旅客殊に學生修學旅行の輸送は自動車によるの結果道路の發達は近年また目醒ましいものがあのは周知の如くである、更にここにアメリカはアラスカよりベーリング海峽に橋をかけ亞歐大陸に國際道路を築造して以て世界を救はんとしてゐるといふことである。晩近(六月三日)ローバー商務長官は、軍擴のため過度の軍需工業の振興は將來必ず恐慌を惹起すべきを以て、一同協力して豫め之れに向つて備へる所がなければならぬといふことを警告してゐる。全くその通りで、各國ともに豫算の編制、國債の消化に行き詰りを來した曉には、パニツクの襲來となり、不當に擴張しすぎた、重工業、海運業等は非常なる難局に當面することに

なるべきは蓋し必然である、道路築造の如き平和事業に日常沒頭してゐれば、いかなる恐慌に直面しても狼狽することはないであらう。

前記ヴアチカン宮システィーヌ堂の天井畫はミケル・アンヂエロ畢生の大作であり、人類歴史の諸相、善も惡も、正も邪も、變幻極まりなき時の經過が、無限の轉變として描きつくされてゐる。たまたまアメリカ人は不用意に歐羅巴見物にやつて來るものだから、この堂内に來て天井を見あげても能く意味が判らずに歸つて行くといふことが、スペングラーの「西歐文明の沒落」の初篇十二章に出てゐる。アメリカ人はスペングラーの嘲るが如くに、この大作の意義は能くのみ込めないかも知れないが、併しアメリカ有識者の抱く國際道路の理想はまさに、世界救濟の願望そのものに他ならない。人間の歴史の絶えざる限りは、人類の墮落と救拯の希望この二つは互にもつれ合つて、無限に人類歴史を編んでゆきつつあるものである。ミケル・アンヂエロのこの偉大な表現を、今日の危機に際會して實行に移してくれるもの、經濟力の雄大無邊なるアメリカ人の手による國際道路の實現といふことより以外には、何等期待はあるまいではないか、航空が際限なく發達して、各人がその臀につけたプロペラで、自在に飛びまはる時代が來たとしたら、それこそ人類知力の最大誤用、世界の究極の墮落であらう。空路か道路か、吾人は平和への道は絶對に後者によらざる可らずと確信する。そうしてこの世を後鳥羽院の御歌にある「道ある世」たらしめたいのである。

——一二・六・五——